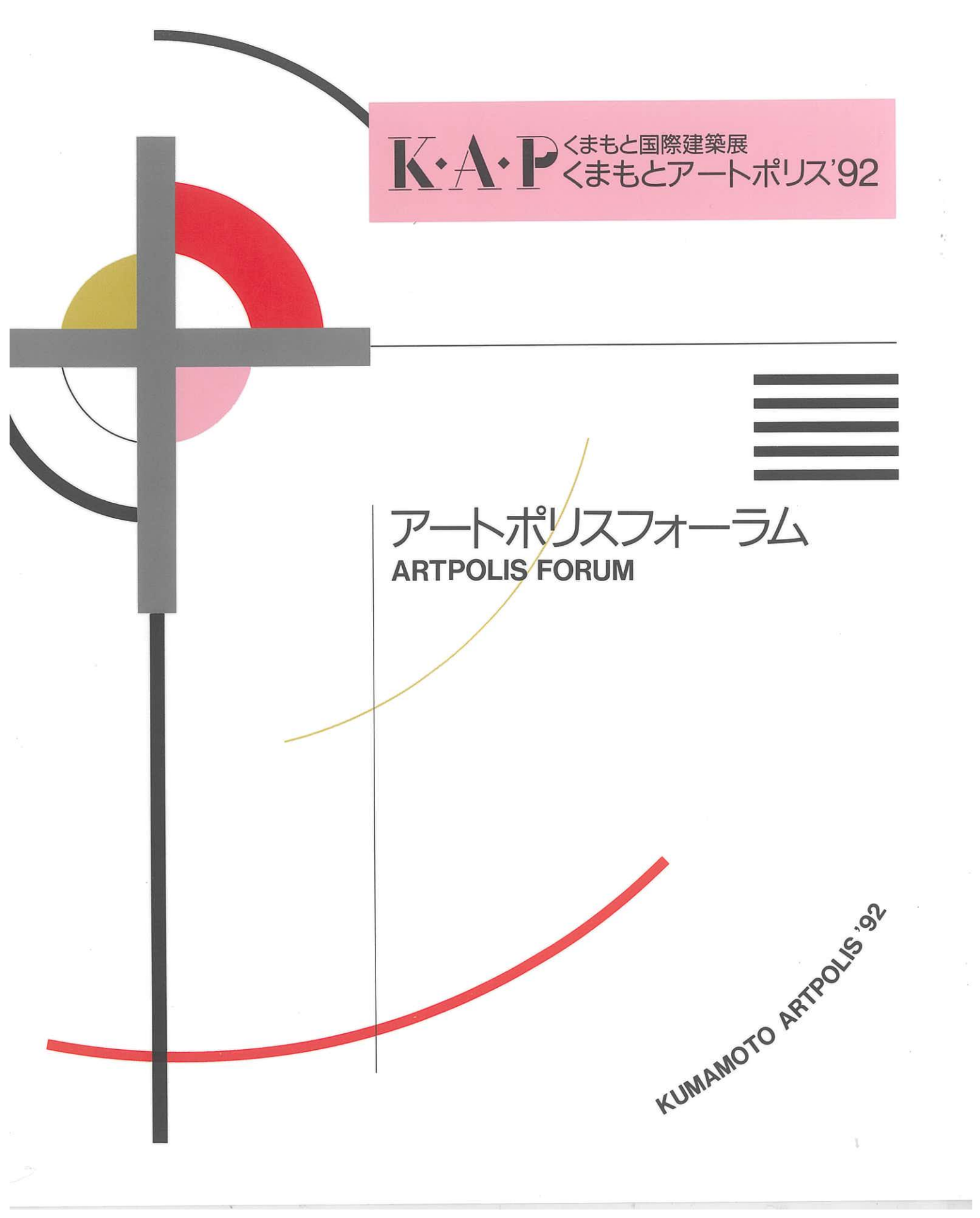
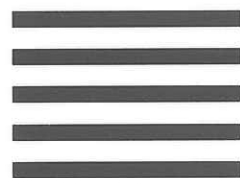


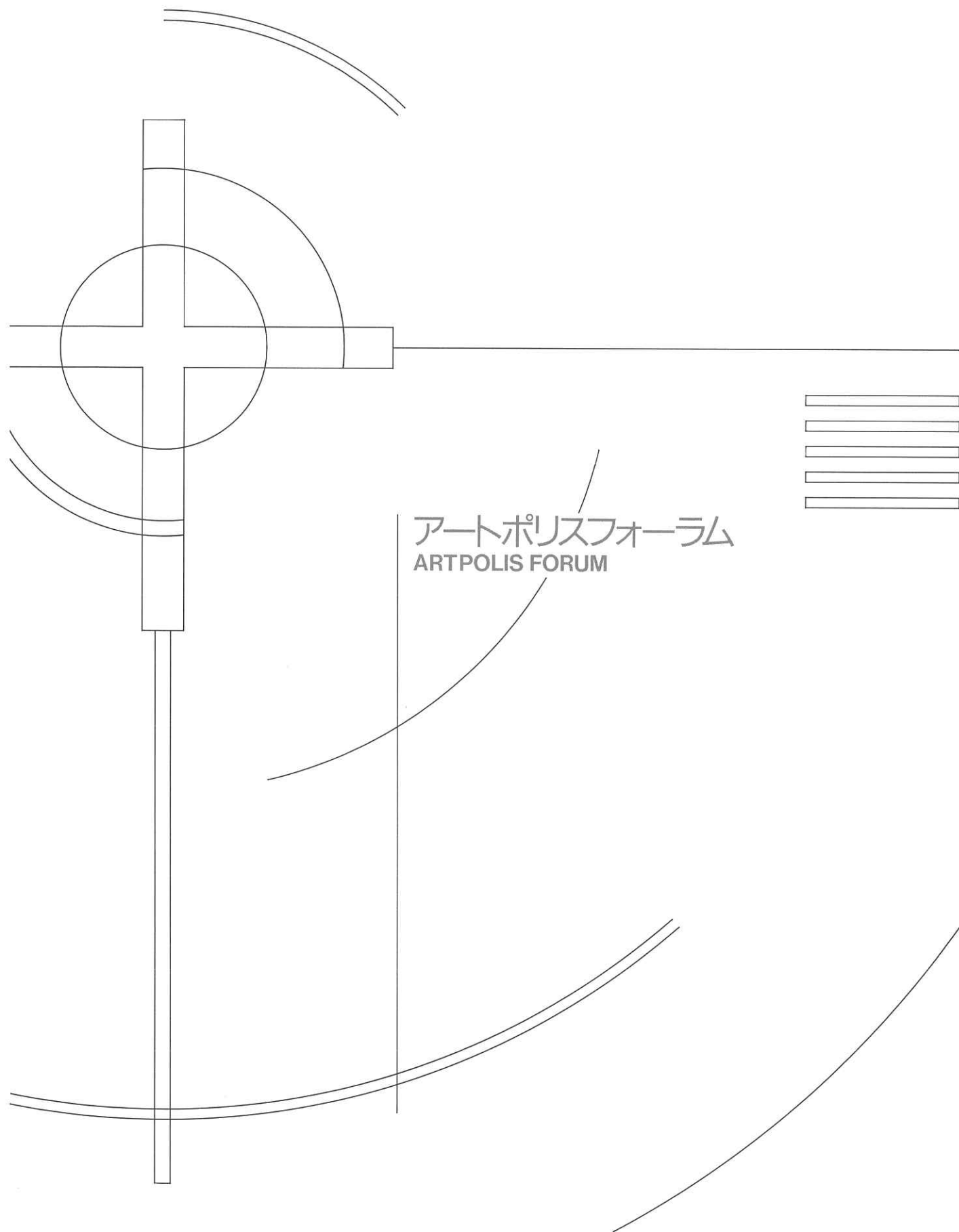


K・A・P くまもと国際建築展
くまもとアートポリス'92



アートポリスフォーラム
ARTPOLIS FORUM

KUMAMOTO ARTPOLIS '92



アートポリスフォーラム
ARTPOLIS FORUM

KAP'92 | アートポリスフォーラム

C O N T E N T S

「くまもとアートポリス'92」を支えた専門部会報告

司会 ————— 広報記録部会長 中川誠之

見学会から：上田憲二郎	04
シンポジウム部会から：岩永 眞	05
展示部会から：近田一夫	06
まちなみ部会から：桂 英昭	07
関連事業部会から：中川 久	09

「地域からの発信」——アートポリス参加10市町村からの報告

コーディネーター ————— 熊本大学講師 桂 英昭

熊本市から：鶴田幸三〔熊本市住宅建設課住宅第1係長〕	10
八代市から：井本恵英〔八代市建築課建設課長〕	12
清和村から：兼瀬哲治〔清和文楽邑支配人〕	13
湯前町から：吉村喜代己〔湯前まんが美術館・公民館館長〕	14
産山村から：井 道行〔産山村産業振興課長〕	15
津奈木町から：浦田伸一〔つなぎ物産ギャラリー所長〕	16
松島町から：渡辺政一〔松島町下水道課長・合津終末処理場施設長〕	17
松芦北町から：本村 等〔芦北町企画課長〕	18
玉名市から：谷口 強〔玉名市企画課長〕	19
河浦町から：濱崎俊雄〔河浦町助役〕	20

「アートポリス」とまちづくり

特別講演 ————— 八代市長 沖田嘉典	22
----------------------------	----

「くまもとアートポリス'92」の全体総括と今後の展望

くまもとアートポリス'92実行委員会副会長 ————— アートポリス・アドバイザー 堀内清治	26
--	----

閉会挨拶

くまもとアートポリス'92実行委員会会長 ————— 熊本県知事 福島譲二	30
---	----



「くまもとアートポリス'92」
を支えた
専門部会報告

司会：

広報記録部会長 中川誠之

中川——「くまもとアートポリス'92」では長期間にわたり、様々なイベントが行なわれてきました。それに関連して、様々な部会で行事を準備、企画、運営していただきましたが、それぞれの部会長から準備の状況、実施の状況、成果などの報告をお願いいたします。

見学部会から：上田憲二郎

上田——見学部会では、アートポリス参加施設の見学の便宜を図ることを目的に活動を考えました。まずアートポリスのガイドブックを作成しました。これにはすべてのアートポリス参加施設の写真、概要などが載っており、1500円で書店で発売しています。また、アートポリスの建物は県内各地にあるので、ガイドブックと併せてガイドマップを作りました。さらにガイドマップを見ても行き方がなかなかわからない場所があるので誘導矢印を作り、これを道のわかりにくいポイントに置きました。また、多くの人が一緒に見学するために、「くまもとアートポリス」参加施設の見学コースを設定しました。市内を周遊するコース、市外のコースが7コース、そして全施設を3日間かけて踏破するコースが企画され、それに伴いバスツアーを開催しました。ツアーには8台くらいのバスで出発しました。バスには添乗員が必要になり、その養成とバスガイド用の資料も作成しました。それぞれの施設は、共同住宅、学校などプライバシーや学業に差し障りのある場所もあり、そのような場所には注意書きの看板を設置しました。そのほかそれぞれの施設には1日中施設にいて、案内役を担当した人もいます。

シンポジウム部会から：岩永 眞

岩永——11月5日から7日までの3日間、県立劇場とメルパルク熊本を会場に、延べ2000人の方々が参加し、国際シンポジウム「都市デザインサミット」を開催しました。初日は演劇ホールにおいて、磯崎新アートポリス・コミッショナーの基調講演をはじめ、ニーム、パリ、フランクフルト、ロッテルダム、バルセロナ、横浜といったユニークな都市づくりで注目されている都市から第一線で活躍中の行政関係者や建築家に参加していただき、それぞれの特色ある地域作りへの取り組みについてスライドを交えて発表がありました。2日目は県立劇場の演劇ホール、大会議室およびメルパルクの3会場に分かれ、「都市と行政」、「住宅と生活」、「建築と文化」をテーマに3分科会が開催されました。各分科会では初日の発表者に加え、新たにアートポリス参加建築家や学識経験者も参加し、活発な討論が展開されました。分科会では、「都市づくりを推進していくにはトップの強い意志と新しい仕組みが必要なのではないか、住民の参加を図っていくことが重要である、あるいは建築は文化そのものである」など多くの貴重な意見が出されました。最終日は各分科会の報告と総括講演を行ない、3日間の全日程を終了しました。

展示部会から：近田一夫

近田——県立美術館分館で11月の約1カ月間開催しました「くまもとアートポリス展覧会」も好評のうちに閉会を迎えました。「くまもとアートポリス展覧会」では参加プロジェクトの模型を数多く展示し、見学者からはおもしろい、たいへんすばらしいという感想がありました。「熊本のまちなみと建築展」は、県民の身近にある優れた建築を再認識するよい機会になったと思います。いろいろな方々の協力を得て、すべての展示は充実した内容となり、見ごたえのある展覧会になったと思います。11月29日現在、総入場者数は約7500人です。県外からの見学者も多く、岐阜県議会、神戸市議会などの視察をはじめ、様々な団体の入場があった一方、九州大学の建築科、信愛女学院、熊本工業高校などの学生のように校外学習の一環として見学にきたという事例も数多く見られ、喜ばしいかぎりです。団体の申し込みだけで約2000人にも及びました。来館者は建築を専門にする人だけに限らず、家族連れや誘い合ってきた主婦など様々な層の見学があり、「くまもとアートポリス」の全容を理解してもらう好機となったと思います。簡単なアンケートを会場で実施しましたが、多数の貴重な意見が回答されました。例えば、「熊本県がアートポリス事業をやっていることを知らなかった。自治体が行なう事業としては画期的だ」という人もいました。また、県外の方からは、「展覧会という形で事業全体をまとめて見ることができ有意義だった」という感想がありました。そのほか、「この事業を熊本県に根づかせ成長させてほしい」との声が数多くあり、今後の活動の励みとして活かしていきたいと思っています。

桂——「まちなみ展」を八代、熊本、小国で開催しました。都市デザインサミットが建築や都市設計の専門家の催しとすれば、それに対して「まちなみ展」は住民を主体として、皆が参加して建築を祝い、今後のまちづくりや建物の活用を考える、そのようなイベントでした。最初に「八代まちなみ展」が8月に行なわれました。このスライドは、八代市立博物館未来の森ミュージアムで行なわれたオープニングセレモニーやテープカットの模様です。このイベントには全国の学生のツアー参加があり、学生たちが博物館の設計者である伊東豊雄さんとともにこの博物館について語り合う機会もありました。このお祭りは建築だけでなく、郷土芸能など日常的な文化活動とまちづくり、そして建物について考えることを趣旨とし、例えば郷土芸能の太鼓が新しい博物館の前で演奏されたりもしました。その中で歴史意匠委員会の九州支部の方に来ていただき、古い建物と新しい建物の観点からまちづくりを考えるというシンポジウムも行なわれました。八代市で開催された一番大きなアートボリス関連のイベントが「アートボリス祭」で、ここでは建築に関する話もありましたが、今後のまちづくりについて日ごろの音楽活動や祭りなども含めて考えました。続いて、「熊本まちなみ展」が8月2日から始まり、シンポジウム関係が10月に集中的に行なわれ、11月には展覧会が主に展開されました。まず最初に8月2日、ファミリーワークショップが立田山で行なわれ、これはその工作広場の模様です。10月にはアートボリスの施工者のシンポジウムや保田窪第一団地での住宅のワークショップ、それから設備関係のシンポジウム、構造の関係者による構造についてのシンポジウムなどが行なわれました。これらのシンポジウムでは建物の仕組みについてたいへんわかりやすく説明されました。これは清和村の文楽館の木の組手について説明しているところです。できるだけわかりやすく建築を考えるというのがこのシンポジウムの趣旨でした。11月には「ジョイントアート」展が行なわれました。熊本在住のアーティストと一緒にアートボリス作品のパネル展示や世界の椅子展などが行なわれました。展示の中で古楽器の演奏者と一緒にコンサートをやっているところです。これは上通郵便局での「新旧まちなみ展」で、奥ではアートボリスによる建物が建つ前後を比較しているパネル展が行なわれています。これは北署での創作生け花と小学生が描いた「くまもとアートボリス」作品の絵画コンクールの優秀作品の展示風景です。また、これは11月にアートボリスの行事をアピールするために新しくできた県立美術館の分館をライトアップしている模様です。「ジョイントアート展」や「新旧まちなみ展」など多くの催物がありましたが、それらをつなげるためオリエンテーリングを行ないました。これはオリエンテーリングを終えた子

供たちが景品をもらっている様子です。11月9日から15日まで小国で「まちなみ展」があり、テーマは「デザイン、人、暮らし、緑」です。これは小国のユースステーションで、アートボリス作品のパネル展示が行なわれているところです。そのほか「くまもとアートボリス」の行事には＜田園に佇むキオスク＞、無人販売所の全国公開設計競技があり、そこで選ばれた優秀作品3点を実際に作り、並べている様子です。中央にあるのが土の塊のキオスク、左側がベニヤ、コンパネを300枚重ねて作ったキオスク、それから右側がスチール加工し膜構造になっているキオスクです。新しいスタイルの無人販売所を小国で作って公開しました。最後の「まちなみ展」は11月14日に小国町のドームで行なわれたオールナイトでのフリートークで、これはそのために作った世界一大きなコタツです。このような渦巻型のコタツを囲み、食事や討論をしました。以上のように八代、熊本、小国の順序で「まちなみ展」は開催され、それぞれ参加者は八代では9000人、熊本では4万5000人、小国では1300人という数字を数え、「くまもとアートボリス」をきっかけに＜まちづくり＞＜生活＞＜デザイン＞について討論したのが「まちなみ展」でした。

関連事業部会から：中川 久

中川——アートポリス関連事業は8月から11月までに11行事が行なわれ、8月1日から2日にかけて湯浦活性化協議会の主催により、芦北町の「くまもとアートポリス」参加作品である湯の香橋を中心に、湯の香祭りが、手作りいかだレースや浴衣ファッションショーなどをその内容として行なわれました。9月26日には熊本県建築士会玉名市支部の主催で玉名市のアートポリス作品である玉名天望館の見学会、設計者高崎正治氏を迎えての講演会が開催されました。9月29日には熊本県産材振興会の主催により、熊本市の流通情報会館において熊本木造建築研究集會が行なわれました。11月2日には熊本まちづくり協議会の主催で、熊本市の上通において徹底町論が開かれ、＜建築とまちなみ、景観との関係＞について討論が行なわれました。11月10日から23日までは日本インテリアデザイナー協会九州事業支部の主催により、県立美術館本館横の別館において「九州インテリアデザインinくまもとアートポリス」と題し、会員の作品展のほか見学会やセミナーなどが行なわれました。11月10日と17日の2日間に分け熊本県建築士会の主催により、県立美術館において海外まちなみづくりスライド発表会が行なわれ、実際に海外に行かれた建築士会の会員により、海外のまちづくりについての発表会がありました。11月13日、津奈木町の主催により、津奈木町アートポリス参加作品であるつなぎ物産ギャラリーの設計者である北山孝二郎氏の講演会が開催されました。11月16日、清和村文楽の里協会の主催により、清和村アートポリス参加作品である清和村文楽館において「木の構造」のシンポジウムが開かれました。11月20日には「景観フォーラムIN人吉」実行委員会の主催により、人吉市のカルチャーパレスにおいて「景観フォーラムIN人吉」が開催され、人吉の将来を考え、人吉の景観はどうあるべきかという観点から検討がありました。11月22日、23日の2日間、湯前町の主催により、湯前町のアートポリス参加作品である湯前まんが美術館の落成を記念して、「'92国際まんが・食・文化フェスティバル」が開かれました。そのほか10月6日から9日までの4日間、建築士事務所協会、新日本建築家協会、建設業協会建築部会の建築3団体の主催で、熊本市下通アーケードにおいて建築団体会員作品展が行なわれ、通りを歩く多くの人々の注目を集めました。熊本各地で様々な関連事業が展開され、「くまもとアートポリス」を広くアピールすることができました。



「地域からの発信」

アートポリス参加
10市町村からの報告

コーディネーター：

熊本大学講師 桂 英昭

桂——この討論会は「地域からの発信」をテーマに、10市町村からアートポリスを通してあるいは現在展開しているまちづくりについて発表をするものです。それでは熊本市の鶴田係長に市営の団地を中心にお話をおうかがいしたいと思います。

熊本市から：鶴田幸三 熊本市住宅建設課住宅第1係長

鶴田——私の報告は「地域からの発信」というテーマに隠されたくまおこし>という意味とは若干ずれていると思いますが、「くまもとアートポリス」に参加した本市の4つのプロジェクトの説明という形で報告をします。映っているスライドはプロジェクトの1つ、新地団地の500分の1の模型です。この団地は約13ヘクタールの中に716戸の木造簡平の住宅を、3階建てあるいは高層7階建ての1078戸に改造する予定で現在進行中です。「くまもとアートポリス」の参加事業では最大規模のプロジェクトと思いますが、ここには5人の設計家が参加しています。1期が東京の早川邦彦さん、2期が2年前に亡くなりました熊本の緒方理一郎さん、3期が東京の富永譲さん、4、5期が福岡の西岡弘さんと熊本の上田憲二郎さんで、以上5人の設計家と1つの事務所が協同で設計を進めています。現在1、2期の住宅が完成して、500世帯の入居が終わり生活が始まっています。3期が現在3回コンクリート打設中で、4期が今度の議会で承認され、仮契約が済んでいるところです。これが早川邦彦さんの設計による住宅で、両サイドにあるのが中層5階建て、107戸、104戸、そして中央の低層棟65

戸からなる住宅です。この団地は建て替えということもあり、1人あるいは2人のお年寄りの世帯が多く、少しでも家賃の負担を軽くするために2DKの住宅を51戸設けています。このような囲み型の住宅はこれまでの公営住宅にはなく、斬新なデザインになっています。この少し後ろにあるのが集会場で、団地に住む人だけではなく、地域の人々にも開放され利用できるようになっていました。1階には障害者の車椅子を使用する世帯の住宅を10戸を設けてあります。集会場の前から東側の中層5階の住宅を覗いたところですが、これは深さ15センチくらいで熊本の水をイメージして設置しました。夏には子供のための親水施設として喜ばれると考慮し作ったのですが、我々の想像以上に水や汚れなどが問題になり、現在苦慮しているところです。これが2期の緒方理一郎さんが設計した、121戸、109戸の住宅です。中層5階建て、螺旋階段が向かい合っていて、その間にある広場を＜光の庭＞と呼んでいます。＜光の庭＞で団地の住民あるいは地域の人々が催し物をする際、螺旋階段は観覧席、栈敷になるというのが設計者の意図です。また、このシンボルタワーと街灯は、4期にも同じようなシンボルタワーを作りますが、それらの軸線を結ぶと長い団地が1つに結びつくという工夫がされています。2番目のプロジェクトの託麻団地は3人の設計家が参加しています。新地団地は各工期を1人の設計者が担当しましたが、託麻団地の場合は各工期に3人のスタイルでそれぞれ住棟を1棟建てます。従来276戸の住宅を371戸に改造する予定で進行中です。映っている建物は松永安光さんが設計した住宅、69戸ですが、ここも92年7月から入居が開始され新しい生活が始まっています。これが3人の設計者の中で唯一の女性、長谷川逸子さんの設計による住宅です。これはもう1人の建築家、東京工業大学の坂本一成さんの作品です。1階には、車椅子を使用する世帯のために設けた部屋があります。また、この1階には新地団地と同じように高齢者のために2DKを用意しています。この部分には団地内を通り抜けたりあるいは団地外へも通り抜けることができ、それによって団地の住民と団地外の人とのコミュニケーションを図るという仕掛けもされています。これが1期工事によって完成した住宅の航空写真で、この部分が松永さん、長谷川さん、坂本さんの設計になる住宅です。現在ここに坂本さんが設計された住宅ができているのですが、中央緑道と住棟の中を歩くことができる仕掛けもされています。本市は団地のほかに花畑パークトイレなどがアートポリスに参画しています。公衆トイレが汚いため、美装化トイレの計画に取り組んだ矢先に「くまもとアートポリス」事業が提案され、花畑パークトイレも参加しました。これは大塚豊一さんの作品です。映っているのは上江津湖畔トイレで、日田兆さんの作品です。このトイレに階段があるのは梅雨時、大水の際、浸水が予想されるので高床式のトイレにデザインされています。現在新地団地、託麻団地は事業が進行中で、完成は1995年の夏ごろです。

桂——「都市デザインサミット」の討論でも言及されたことですが、「くまもとアートポリス」の成果の1つとして公営の集合住宅の建築があります。日本の戦後の公営住宅が置かれた状況を考えて、紹介された熊本市の公営住宅がいかに新しいことを考え、新しいデザインを我々のまちの中にもちこんでいるのかわかるような気がしました。続いて八代市の井本係長をお願いします。

八代市から：井本恵英 八代市建築課建設係長

井本——これは竣工間近の八代市立博物館です。施設の概要などは省略して、博物館のまちづくりへのかかわりという点について述べます。この八代市立博物館はたいへんモダンでファッショナブルな建物で、全国からたいへん高い評価を受けており、博物館自体が展示品ではないかと考えています。これは、近くの通り町の商店街の皆さんの熱意により、博物館を設計した伊東豊雄さんが設計を手がけたギャラリーエイトです。ギャラリーの内部は非常に狭いのですが、商店街の人たちが展示やコンサートなど多様な活動を展開しています。博物館が文化の大きな核になる施設とすると、こちらは地域に応じたユニークな活動を展開している、小さな文化の核と言えるのではないかと思います。8月にアートポリス'92の前夜祭として、「八代まちなみ展」を開催しました。これは、都市ギャラリー回廊展、シンポジウム、アートポリス祭を3本の柱とする一大イベントです。これには市民の手作りのまちづくりをアートポリスで表そうと75団体が参加し、多くの市民が頑張って協力しました。このイベントの開催により、建築家は単に建物を作るだけでなく、まちづくりをするのだということを市民に知ってもらうことができました。また工業専門学校の学生はまちの模型を作り、自分たちのまちはどのような形がよいのか、あるいは今後どのようにしたらいいのかということを市民と一緒に考えました。このようにまちづくりを市民の身近に引き寄せてくれたイベントであったと思います。また地方にいと有名な建築家と身近に話すこともできないわけですが、「くまもとアートポリス」に参加された建築家と交流をもてたことは大きな収穫、財産であり、たいへん感謝しています。八代市では今後このような施設を、1つの建物から、2つ、3つ、4つと増やし、様々な面でつなげていきたいと考え、消防署、保寿寮の設計を伊東豊雄さんをお願いしています。消防署の設計に関しても、今までの消防署にはないような提案がされています。また、高齢化社会には欠かせない保寿寮に対してもどのような提案がされるのか期待しているところです。八代市から全国に新たな独自の提案を発信していきたいと張り切っているところです。今後乞うご期待ということで私の報告を終わります。

清和村から：兼瀬哲治 清和文楽邑支配人

兼瀬——私たちは「くまもとアートポリス」に参加して本当によかったと考えています。文楽館を作るに当たり、設計を担当された石井和紘さんに以下の4点をお願いしました。まず文楽館自体が文化の器なので建物そのものも文化であってほしい、この地域の建築文化を代表するようになってほしいということ、それから建物そのものの魅力が人を引きつけるものであること、本格木造の建築であること、そして周辺環境との調和を図ること、この4点です。その結果は、文楽館の建物に見事に収斂したと思っています。文楽館には、私たちの願いがすべてかなえられています。これからの文楽館の役割は文楽の伝承と村づくり、村おこしに関連することですが、まず文楽の伝承に関しては、文楽館への入場者数はすでに3万人弱になっており、公演回数は138回、観覧者数は1万2000人となっています。昨年まで公演回数は6、7回だったのですから、この数字は本当にすごいと思っています。1つの外題につき40回も公演をすると、文楽の保存会の技術はもとより、知識、認識、すべてが向上し、様々な点でレベルアップにつながると 생각합니다。また、観覧料をいただいて公演をするわけで、お金をいただき楽しんでもらうにはどうすればよいかを考えなければなりません。文楽館という非日常的な空間で非日常的な経験をさせていただくわけですから、それが楽しいものでなくてははいけないと思います。そのために保存会は脂汗を流し、失敗したら一晩眠れないという緊張感をもちながら頑張る。そういうことから文楽を保存するための経済的なサイクルができてきました。これで、自力で文化を残す展望がかすかに見えてきたような気がします。それから村おこしについては次のようなことがあります。私たちは有機農業をやっていますが、今年の新米を文楽米と名づけて売り出しています。清和村のすべての農産物、農産加工品に文楽のシールを貼り、文楽と地域とのつながりを図っています。そのほか文楽館には小さな売店があり、土産物や農産加工品を売っていますが、その売り上げも相当な額になっています。そこで売文楽弁当も食べた方の人数は3000人になります。こういった文楽館から地域への波及効果が徐々に現れていると思っています。また、文楽館ができたことに対する周囲からの反響も出ています。例えば、清和村を出て今は北海道に住んでいる人が、文楽館の記事が載った新聞をわざわざ送ってくれたり、清和村出身者が文楽館を紹介するテレビを見て涙が出たという話をしてくれたりします。「くまもとアートポリス」や文楽館が紹介されていた」と、旅先のホテルから新聞をもってきてくれた人もいます。このように東京から全国に情報が発信され、反響を呼びました。県内からも多くの反響があり、熊日短歌会の橋本しずえさんが、「文楽の黒子を脱げば農婦にてあとは田圃の稲刈りに行く」という短

桂——アートポリスに参加した八代市を見て、建物ができることによってまちの空気が変わることがあるのだと感じています。報告にあったように複数の建物を各所に作りながら、点から線、そして面へ広げていく、そのような試みの具体例を示していると思います。また、八代市では建物を作るだけでなく、シティアーキテクト、まちの建築家を選んだと思います。続いて清和文楽館の兼瀬支配人からお願いいたします。

歌で地賞を受けていました。このような反響に村の人も保存会の人々も勇気づけられて、今後も文楽の保存や村おこしに取り組んでいくと思います。建設が終わるまで、また運営をするに当たり、国、県それぞれの立場での担当者は皆、まさに格闘をしてきたという気がします。請負の方は3分の1の模型をわざわざ作りました。大工の方が墨だしをするのに1週間寝られなかったというエピソードもあります。そのような格闘をして文楽館はようやくできたのです。今後の運営にもこれまでの経験を活かし、引き続き格闘をしていこうと考えています

湯前町から：吉村喜代己 湯前まんが美術館・公民館館長

吉村——湯前町の「くまもとアートポリス」参加のいきさつについて若干説明したいと思います。湯前町は熊本市から127キロ離れた宮崎県境の小さな村です。過疎が続く中で村おこしが始まりました。湯前町は第3セクターで運営している湯前線の終着駅でもあり、この駅周辺を湯前町の顔として開発することから村おこしは始まりました。そのような中で那須記念館を湯前町の顔として建設することが計画され、「くまもとアートポリス」への参加となりました。まず那須良輔先生の紹介をすると、氏は湯前町出身で、戦中、戦後を通じ政治漫画家として日本漫画界の三羽ガラスと言われました。まんが館の計画は氏の作品を末永く展示し、漫画文化を知ってもらうことを目的に開始されました。調査委員会を作り、その結果、中央公民館も包含したまんが美術館の建設という答申が出されました。まんが館は桂英昭さんの設計です。まんが館の設計には、まず郷土玩具である雄車を形どった館、そして地場産の杉を使った木造の建物、中央公民館の機能をもつ館という3つの要素があり、設計、施工にたいへん苦勞されたと思います。スライドを使って説明をしたいと思います。これが湯前駅周辺です。駅の線路側にはレールウイング、いわゆるイベント広場があり、左側の白い5棟の建物が美術館、公民館の機能ももちます。5棟すべてが1700メートルの霊峰、市房山を抜いて走るような姿になっています。これが雄車の形をしたまんが美術館、中央公民館です。平面図で説明すると、上の2棟が公民館の機能ももちます。中には図書館、青年団、婦人会室、そして視聴覚室、料理実習室が組み込まれています。下の3棟の中央にあるのが玄関で、黒く塗っているところが事務所、その裏が那須氏の作品の常設展示場、後ろの小さなスペースは作品の保管倉庫、一番下の建物は特別展示場で、現在は日本漫画集団の作品を展示しています。上棟式にはこの地域に昔から習慣として残っているとおりに餅を屋根の上から投げ、それを子供たちが競って拾うというこ

桂——清和村の文楽館は伝統文化や地元の産業と建物が結びついた好例であると思います。次に湯前町の吉村館長からお願いします。

とも行ないました。これがまんが館と公民館の間にある中庭です。地場産の石を敷き詰めてその間々を芝で結び、柔らかい感じのする中庭です。これが那須良輔まんが館の内部です。11月23日、24日に開催された「'92国際まんが・食・文化フェスティバル」で落成式と記念行事を行ない、盛会に終わりました。これを湯前町の顔として売り出しながら、湯前町の活性化に努力するつもりです。このほか湯前町には日本一大きな水車があり、これも活性化のなかで活かしていく予定です。

産山村から：井道行 産山村産業振興課長

井——産山村は人口2000人弱、戸数は約500戸の小さな過疎の村です。しかし後継者が大勢いてたいへん元気のよい村です。1988年に温泉の掘削に成功し、温泉センターが計画されました。国土庁の補助事業を入れ計画を進めている段階で「くまもとアートポリス」への参加の要請がありました。この構想は非常にすばらしい、夢があると考え、「くまもとアートポリス」への参加を決定しました。温泉センターは東京のワークショップが設計したガラスハウスで、環境庁の指定した名水百選のすぐそばに建設されるため、周囲の田園風景との調和が心配でした。これが全景で、第1期工事が温泉、第2期工事が物産販売関係の施設とレストラン、第3期工事が花の温室で、現在第1期工事が完成し、温泉はオープンしています。センターの内部は明るく気持ちのよい、開放感のあるスペースで、周囲には花や芝を植栽しています。通路は現在約50メートルで2期工事が完成すると100メートルになり、全部通って見えるようになります。また、柱がないので、空間を自由に利用できます。これが室内の岩風呂、手前はハーブ風呂です。これが露天風呂です。ガラスハウスの特徴をどのように活かしていくのがこれからの問題だと思います。農家の人たちにはガラスハウスは仕事場というイメージがあり評判が悪かった。この反応に対して「たいへんだ、議会から怒られる」と考え、温泉センターにきた数百人に対しアンケートを実施しました。その結果95パーセント以上が非常に快適であると回答し、それをもとに議会には納得してもらいました。村の活性化への温泉センターのかかわり方については次のように言えると思います。大勢の客が来て喜んでもらう、そうすると温泉センターの経営も順調にいきます。経営が順調であれば、それは村の誇りになる、このように展開すると思います。今後できるならば温泉館の周囲の土地を2、3ヘクタール借り、花を植えたい。そして花に囲まれたく花の温泉館>を作っていきたいと考えています。温泉館の内部にはライム、レモン、特にレストランにはそのような木を植え、ガラスハウ

桂——次に産山村の井課長に花の温泉館について
てお願いしたいと思います。

桂——村の住民と外部から来た人の評判に違いがあったという指摘がありました。その違いは「くまもとアートポリス」の目的の1つである、今まで自分たちが思ってきたことを別の視点で見直し、まちづくりや建物の利用を考えるということと関係があると思います。次に津奈木町の浦田所長からつなぎ物産ギャラリーについてお願いします。

スの中にはハーブや野の花も植え、実質的なく花の温泉館>にしていきたいと思っています。温泉館に大勢の人が訪れ、その結果経営が順調にいくとそれが村の活性化に大きく寄与すると思っています。

津奈木町から：浦田伸一 つなぎ物産ギャラリー所長

浦田——田舎へ行けば行くほど自然は豊富にあるが、憩いの空間は少ないのが現状だと思います。そのことを考慮に入れ、緑と彫刻のある津奈木町に都会的な洒落た物産館を建てました。物産ギャラリーを建てた理由は、この間様々なイベントなどで村の活性化を図ってきたのですが、生活に密着した活動をまず先にやるべきではないかという若者の意見や第1次産業の発展を望む声に対し、都会へ特産品を発信するために物産ギャラリーの建設に着手しました。また、津奈木町には特に目立つ観光施設がないのでPR効果を高める意図のもとにアートポリスに参加しました。設計は東京の北山孝二郎さんです。大きな楠が左手と国道を挟んで右手にもう1本あります。ここを通らなければまちの中心に行けないので、この2本の木にはグリーンゲート、緑の門という名前がついています。施設を紹介すると、建物は2階建てで、大きなグリーンの屋根がついています。この屋根のために3階建てにも見える。小さな施設が大きく見えるのです。手前にはスロープがあり、当初玄関にこのような壁があると客が拒否感をもつのではないかと懸念しましたが、このスロープはいろいろなイベントに使えることがようやくわかってきました。このスロープの中が眼鏡橋公園になっており、左がパーゴラと言って木の囲いの遊びの空間で、これの1つの壁になっています。狭い敷地を2つの壁でさえぎることによって、内側では家族が弁当を広げて楽しめるといった空間を作っています。右手にある彫刻は製作費が1500万円で、池の中央に設置してあります。2階で郷土料理を提供していますが、少し変わった形をしていて、座るとお尻が痛いという声があったのですが、都会風でかわいいという評判が最近増えています。これが敷地に隣接し、たいへん人気のある眼鏡橋ですが、わざわざ見に来る人もいます。これが眼鏡橋が架かっている津奈木川で、1年後には親水公園になります。5年間鯉の放流をしているのですが、鯉と子供たちが戯れられる場所ができます。この川に隣接したところで今年温泉が出て、温泉センターも建設が予定されています。国道を挟み、物産館の前方に音楽ホールと歴史資料館が建っています。これが今度行なわれたイベント「ミニ花博」の様子で、国道から丸見えではなく中で憩える空間ができたということで、好評を博しました。これが店内風景です。向こうから農産物、林産物、中央にお酒関係の物産が置いてあります。手前には海産物コ

ーナーを設けています。全体の長さは33メートルあり、横長になっています。この物産ギャラリーは若者から出た意見をもとに取り組んできましたが、このような建物があるとまず若い人たちが集まってくる。集まってきた若者がお客さんを見て次の計画を考える、というサイクルが生まれ、それがメリットになっています。物産ギャラリーは小さなイベントを含めて、まちづくりのなかで大活躍していくと思います。

松島町から：渡辺政一 松島町下水道課長・合津終末処理場施設長

渡辺——松島町のアートボリス参加作品は下水道施設の管理棟です。一般に下水道終末処理場はイメージ的に汚い、臭いという代表的な3K的施設で、住民からも周囲を通る人からも好感をもたれない施設です。この施設を建設するに当たり、下水道行政に携わる立場として、そのような見方について説明をしたいと思います。まず施設のある場所は松島町の玄関口にあり、左側が海で、この路線が天草の上島の東海岸線に通じる国道266号線です。このラインが本土方面に通じる324号線で、施設はここに 있습니다。ここは旧干拓地で、266号線は旧干拓地の堤防でした。海岸側に20数ヘクタール余りの埋め立て地があり、現在ショッピングセンターなどがあります。こういう立地条件のもとで計画を進め、処理場の用地を確保したのは10年近く前になり、当時このような発展は予想されていましたが、建物もまったくと言っていいほど建っていない環境でした。建設を進める際の基本的な考え方は地域のイメージ、観光松島としてのイメージを損なわない質の高い建物を作るという計画で住民と対話しながら進めてきました。また、処理場に対する住民の意識の変化を図るような施設を作るという考えのもとに、この建設計画は進められてきました。このような中でアートボリスへの参加を決定し、今年の3月に完成しました。施設の概要を説明すると、これが324号線方向、西側から見た景色で、施設の中央をコンクリートの壁が縦断しています。設計者は熊本の斉藤宏さんです。工事は日本下水道事業団、機能的な部分は事業団のチェックを受けながら進めてきました。全体的なイメージとしては天草の五橋、五号橋のパイプアーチのラインをこのアール壁で設け、その東側に現場部門の施設を入れ、西側は管理部門でアール壁を中心にして施設を区切っています。下水道課の職員はここで日常業務に携わっていますが、非常に快適で住民からもこれが下水道の処理場かというような好意的な評価を受けています。また、全国的に下水道事業は国の重要政策であること、本処理場は周囲が観光地であること、そして人の集まる場所に近くに建設されていることから、多くの自治体関係者が施設を

桂——津奈木町はきれいな彫刻や古い石橋などもあるまちとして注目していたのですが、まち自体からは比較的暗い印象を受けていました。しかし、グリーンゲイト周辺が非常に明るくなったため、彫刻を見に来る人も多くなっているのではないかと考えています。続いて松島町の渡辺施設長に合津終末処理場についてお話をうかがいたいと思います。

見学、研修に訪れます。この施設は天草、松島にマッチし、天草の橋、青い海、青い空をイメージして建てられ、住民からも好感をもって迎えられています。間接的に下水道事業に対するイメージアップにも建物自体が貢献していると思っています。これは鳥瞰図のスライドで、処理場はこの地点にあります。松島町ではふるさと創生事業の一環として、この背後地を運動公園にするため1996年の完成を目途に工事を進めています。この地域が繁華街、こちらが運動公園となり人々が集まる場所になるため、その間に挟まれて、処理場をどのように運営していくのかを考えた際、地域の発展にとってネックにならないようにすることが重要だと思っています。そのためには処理場を、敬遠されるのではなく住民が利用できる施設にすることが重要だと考え、ホールでは小規模の美術展を行ない、野外ではバーベキューができるようにし、会議室も円卓会議室を設け、地元の人が利用できるよう整備して地域住民との交流を図り、周囲の景観への配慮はもちろんのこと、そのような施設の活用も進めていきたいと考えています。

桂——まちの中では終末処理場のような施設は隅に追いやられてしまうのですが、このようにデザインされることで印象がまったく変わるだけでなく観光にも役立つ、という意味をもつようになることを知らされました。芦北町の本村課長から湯の香橋についてお願いいたします。

芦北町から：本村等 芦北町企画課長

本村——芦北町には古くから赤く着色された太鼓橋型の木橋があり、地元民は強い愛着をもっていました。そのため新しく建設する橋については、温泉の歴史、湯の香橋の語源に対する配慮が設計の中に入っているのかということが論じられました。しかし設計者の説得により、新しい文化、新しい歴史を生み出すことができるような橋とすることを設計の基本として合意し、次の点が設計の際の留意点でした。まず水辺に親しむ日本の伝統を配慮する、そして照明効果を考慮すること、そして単に向こう岸に渡ることが橋の役割ではなく、水面に下りて水と親しむことができるような橋というのが設計の基本的な考え方でした。日本の伝統は、曇りガラス風の合成樹脂を手すりに使用し、太陽の光の変化がわかり人の影を障子越しに見るような演出に活かされています。橋に照明施設が組み込まれ、グレーティングの床、先ほどの手すり、橋の下水面まで見えるように計画されています。夜この橋を見るとたいへんモダンで美しく、文化的な薫りが漂うのがよくわかります。橋の設計に関しては多く論じられたのですが、特に完成後には地元の若者約30名が町の活性化を図ることを目的として、湯の香橋にちなみ、湯の香祭りを開催しました。参加者は5000人にも及ぶほどの盛況でした。また川の中に下りることができるため、環境の美化を含めた運動も展開しています。さらに湯浦活性化協議会に倣い、旧町ごとに佐敷地区には佐敷場の

復元に伴う活性化協議会、球磨川沿いの吉尾地区にはかじかの会が設立されました。それぞれの地区の若者による村おこし運動が幅広く展開されているところですが、スライドに映っているのは湯の香祭りのいかだ競争の様子で、48チームが参加しました。橋の両側に装飾を施し日本風な橋を作ることが設計の基本でしたが、それにちなみ着物のファッションショーを行ない、盛況のうちに終了しました。この「くまもとアートポリス」に参加をして気がついたのは、文化はそろばんで計算ができるという基本的なことです。さらに才能とアイデアというのは速くて安いだけではだめだということを改めて認識しました。

玉名市から：谷口強 玉名市企画課長

谷口——豊かな自然に恵まれ深い歴史の息づく玉名市ですが、自然と歴史が調和したまちづくりに取り組んでいます。玉名天望館の建設に至る経過はふるさと創生事業の活用で取り組みました。市民へのアンケート、各種団体の意見をもとに桃田運動公園の18メートルの高台に展望館を作る、それも学習と展望の空間を兼ね備えた、子供から高齢者まで自由に登れる、ユニークで芸術性のあるシンボル性の高い建造物を作ること为目标に「くまもとアートポリス」に参加しました。設計はTAKASAKI物人研究所の高崎正治氏に依頼し、9月26日に落成しました。まだ仮称の段階で6月から9月まで4カ月間をかけ名称募集を行ないました。各小中学校に応募箱を設けるほか、広報誌、新聞、公募ガイドブックなどで市の内外から募集をしました。1376通ほどの応募があり、その中から鹿児島市の女子高校生が名づけた「玉名天望館」が選ばれました。名称募集を実施する過程で、市民にアートポリス参加事業であるということをPRできたことは意義があったと思っています。これは天望館から玉名の市街地を見たところで、菊池川、奥に有明海、雲仙岳を望むことができます。市では小学生向けにパンフレットを配布しています。小学生の児童が社会科の授業で天望館に行き、その感想文を先生が送ってきました。そこには「おもしろい形の玉名天望館に登り、自分の家やまち、菊池川を見ることができました。また、大きくなってから来ます」という感想が多くありました。これこそ市民と行政が一体となって住む誇り、愛着のもてる地域づくりを推進するというアートポリス事業の基本的な考え方を実現していると思います。これは天望館を近くから見た光景ですが、1階を憩いの場、2階が展望ができる展望デッキで、ここには生命体の発生起源である卵の形をした小宇宙、玉の室があり、3階には五輪の蓮の花が開いています。3本の矢が玉名市の力強い発展を示し空に向かっていきます。

桂——橋が建築されることによって様々なイベントが起こったという指摘がありました。そして橋を見に行くのにわざわざ夜行くことはないのですが、夜になると湯の香橋を見に行こう、と誘い合って行くことがあります。新しい夜の風景を作った湯の香橋のインパクトが強かったからだと思います。続きまして、玉名市の谷口課長に玉名天望館についてお願いいたします。

桂——展望台に天望館という名前がつくこと、そして天望館の建物自体についてはシンポジウムなどで採り上げられてきました。その形のユニークさ、施工のよさ、そしてそれを盛り立てようとする玉名市民の心意気がシンポジウムで伝わってきました。今後谷口課長が言われたような使われ方をすることを望んでいます。最後に河浦町の濱崎助役から教会の見えるチャペルの鐘展望公園についてお話をお願いいたします。

体の不自由な人も2階へ登れるようにと100メートルのスロープも取り付けられています。これは9月26日の落成式の様子ですが、玉名市の建築士会でも高崎正治氏を招いた講演会、玉名市内外の設計者、建設業者による建築作品の展示会などを行なっています。夜には「玉名の夕べ」が開催され、ライトアップした天望館をバックに太鼓の演奏を聞きながら懇談会がありました。世界的に一流の建造物ができ、地元の設計者の技術面の向上に寄与したと思っています。10月10日の市民体育祭には4000名以上の参加者がありましたが、そのほとんどが天望館に登りました。各種のスポーツ行事をやるときには、同時に天望館でふるさとを眺めることができるようになりました。また、休日になると、家族連れが1階のテーブルでゆっくり持参の弁当を食べる風景も見られるようになってきました。夕方から夜10時までライトアップをしています。市の内外から若い人たちが集う場所として大好評を得ています。今後の活用として、天望館の1、2、3階をステージに見立て、太鼓や笛の演奏、作品の展示などを考えています。そのほか天望館の特色を活かし地域に根ざしたイベントを考えていきたいと思っています。

河浦町から：濱崎俊雄 河浦町助役

濱崎——河浦町は歴史的には1204年から380年間、天草の居城の地として栄えました。特に423年前にはアルメーダ神父が河浦の町でキリスト教の布教を始め、それから20年後には上総から日本で初めての大学、コレジオが移り、4人の天正少年使節を含む、数多くの少年たちが学んだ地があります。この大学校では日本で初めての活版印刷により、『イソップ物語』、『平家物語』など数多くの出版がなされました。これらの印刷物、印刷機や、天正使節がもち帰り、豊臣秀吉の前で演奏した楽器などを収蔵しており、一般にも公開しています。現在豊かな自然、景観と歴史が調和したまちづくりを進めていますが、県の日本一づくり、ふるさと創生事業の一環として、崎津に教会の見えるチャペルの鐘展望公園の整備事業を計画して、これを拠点に崎津全体の活性化やまちづくりを進めているところです。崎津には天草の象徴とも言える崎津教会が海辺にあります。この教会は1934年に山中から移転して建設された建物で、当時は寺院でした。建物は歳月を経て、まわりの自然や風土に調和して立派な文化的遺産となり、観光資源であるばかりか河浦町の歴史を表現する建物になっています。展望公園の建設に当たり、後世に残る文化的遺産を作ることが必要だという考えに基づき、県が進めている「くまもとアートポリス」こそこれを実現するものであると確信して、積極的に参加を

したわけです。実施にあたり全体の構想、設計をインテリアデザインの第一人者である梅田正徳さんをお願いし、教会の見える山頂に展望公園を作りました。そして中心に巨大なチャペルの塔を設置し、その中に鐘を吊るしています。ここからは天草西海岸、教会全部が見渡せ、日本一の景観を作るとともに町民や地域間交流の場、あるいは鐘の音による町民の連帯を目指しています。また展望広場にはイベント広場として、崎津らしい魚を形どったイベント広場があり、様々な結婚式や演奏会、講演会、研修会を開き、地域間交流にも役立てたいと考えています。またこの展望公園は崎津教会から遊歩道でつながっており、遊歩道の周辺には四季折々の草花を配して、崎津の景観を活かしながら新たな自然環境を作り出しつつあります。「くまもとアートポリス」の参加事業では数多くの事業が実施され、創造性の高い建築物が作られています。必ず苦労はあると思いますが、それらは崎津教会のように歳月を経て、大きな歴史的遺産となるものだと思いをしています。教会の見えるチャペルの鐘展望公園も1993年度には完成しますが、教会と新しいチャペルの塔のコントラストも期待しています。さらには教会と展望公園とを遊歩道でつないでいますが、アートポリス事業参加の目的を果たすように、町民の憩いの場、あるいは精神の継承にもつながるようにしたいと思っています。アートポリス参加市町村にとって、「くまもとアートポリス'92」は1つの集大成でもあります。同時に新たな出発点だという認識に立ち、今後崎津に限らず地域の建築物にも積極的に参加しながら文化的遺産を作り出していきたいと思っています。

桂——崎津の教会と新しくできるチャペルの公園の情景を見て、ぜひとも早く行ってみたいと思いました。最後に濱崎助役から、今後見守っていくことが文化遺産を作ることだというまとめをしていただきました。今日の報告会は地域からの発信ということでした。10市町村の方から発表していただいたのですが、短い時間では発表しきれないほどそれぞれの思いや次の計画があるようです。その意気込み、勢いを地域からの発信そのものと受け止めたいと思います。

●
「アートポリス」
と
まちづくり

特別講演：

八代市長 沖田嘉典

■建築家とまちづくりの関係

沖田——ただ今ご紹介をいただいた八代市の沖田です。今日は「くもとアートポリス」の最終的な集まりということで、軽い気持ちでまいりました。熊本市、八代市などそれぞれの都市はアートポリスに参加して非常にユニークな建物を建てている、その建築業界、建築関係の方々が中心になり、このような催しを開催されています。また建築業界の方々に心から敬意を表する次第です。私は建築にも土木にも関係がないので、アートポリスの建物に対する評価はわからないのですが、八代市の場合を申し上げますと、まちの中央に新しく博物館ができました。たいへんユニークな建物で、全国から建築界の方々が参考のために見学にみえるというすばらしい建物です。博物館の建物自体に様々な意見があり、いろいろたいへんだったと思います。しかし、博物館の利用状況は開館から1年くらいしか経っていないのですが、約6万人の見学者が訪れています。八代市に観光で来た方に見学するところを尋ねられたとき、八代城などを挙げていましたが、特筆すべき観光場所がなく困っていました。今度たいへんユニークな建物ができたので、まず博物館を推薦し、そして県が作った港の工業団地、八代のウォーターフロントとして建設が進んでいますが、その2カ所をどうぞ訪れてくださいと勧めています。せっかく有名な建築家である伊東豊雄さんが建物を設計したのに、たった1つの建物ではしょうがないということで、せめて3つくらいの建物は設計してもらおうと広域の消防署などの計画が進んでいます。2つではなんだからもう1つ作るということで（笑）、落ち込んでいる日奈久温泉の真ん中に老人ホーム、保養寮を計画しています。伊東さんにはもっと変わった建物を設計してくださいとお願いしているところです。建物は1、2回見ますと人によっては飽きてしまいますが、その建物の設計者には興味があると思うので、伊東先生にはもっと有名になっていただきたいと申し上げます。先生が有名になると八代市の博物館も有名になるわけです。先ほど芦北町の本村課長がアートポリスは経済的に採算が合うと言っていました。行政としては建てた建築物が採算が合わないという意味がないと思います。そういう意味から、採算を合わせるために1カ所だけでなく、伊東先生の設計した建物はこういう建物ですと紹介するために、3つくらいの建物が必要だと思っています。アートポリスは様々な建物を参加の対象としていますので、まさに建築家の力の振るい場所です。八代市でも清掃センターやその他の建築を行なっていきたいと思いますが、推進するに当たりどのような考えでやっていくのか、今から考えているところです。それは八代市なら八代市、玉名市なら玉名市のまちづくりの一環として建物を考えるということです。玉名市に行ったらあの建物を見てください、というように町の観光の一環としてとらえています。

■長い歴史の中の八代

八代市を紹介しながら話を進めていきますが、先日、中国から黄華外相が八代市を訪れました。園田直さんの墓参りにいらした。黄華さんが常に話していたことは、中国と日本の悠久2000年の交流ということでした。彼が言ったことは八代市では悠久2000年の付き合いがしっくりすることです。八代市にはお祭りが3つありますが、1つは11月の妙見さんのお祭りです。それから8月の初め球磨川のお祭りを盛大に行ないます。そして8月30日ころに八代港のお祭りをいたします。その3祭りを比べると、歴史的に一番古いのは球磨川の祭りで、今年から＜河童祭り＞と名づけました。八代には＜九千坊＞と言われる河童は中国から渡来したいいう伝承があります。九千坊はいつ中国から渡来したかという、中国の『呉書』という文献のなかに、渡来に関して触れている箇所があるのです。『三国志』の時代、魏、呉、蜀の時代で、蜀には諸葛孔明、劉備玄德がいたという紀元200年ころ、呉の孫権が日本にたくさんの人たちを寄越したという記述があるわけです。秦の始皇帝が日本にある不老長寿の薬を取ってこさせるために、たくさんの人々を日本に寄越した、そして何千人も台湾と日本に寄越したのに誰も帰ってこない、その子孫がどうなったのかいうことを求めて、呉の孫権が寧波から多くの兵や善男善女を九州や台湾に寄越した。ところが九州に行った人たちはまた帰ってこない、という歴史があったということです。そのとき、中国の人たちは球磨川河口に上がったと書いてあるわけです。呉の人たちは球磨川から上がって人吉から霧島の一帯に定着し帰化したということです。球磨川河口に水島がありますが、そこにはたくさんの人骨があります。そこに九千坊という人がいて、その人たちの骨なのです。つまり、八代は2000年前近くから中国と交流があったということです。もう1つ八代には伝承があり、それは妙見信仰です。中国から黒潮に乗って来ると何もしないでも芦北に着きますが、1300年くらい前にやはり中国から亀蛇（がめ）というのに乗った、妙見信仰という星の信仰をする武将が竹原の津に降りた。それが妙見信仰の始まりで、九州一円に浸透し100年くらいして上宮、中宮、下宮ができたわけです。長い歴史の中で、八代にはそのころの文献はまったく残っていないわけです。文献があるのは加藤清正の時代、それから松井氏の時代からですが、それ以前は何も残っていない。豊臣秀吉が八代に来ていることがルイス・フロイスの書の中に書いてあります。関ヶ原の戦いの13年前のことで、その頃は島津氏が八代を占領していましたが、島津が暴れるものですから秀吉は小西行長を連れて、古麓という山城に陣取っていた。河童が悪さをするというので、こらしめに河童を皆殺しにし、その血は球磨川を朱に染めたと言います。また、八代には2万人のカトリック教徒がいた。それを全部追放するために麦島に磔にして首を並べたと言います。逃れた人たちは天草に行った。天草の大弾圧の10年前に八代ではこのような弾圧があったのです。これは日

本の資料がなく、ローマにあった。ようやく1991年に、その弾圧の300何年祭のカトリックのミサをやりました。今までそういうことについて八代の人々は何も知らなかった。そのような八代の歴史を掘り起こしながらまちづくりをしていきたいと思います。河童の2000年から、妙見の1300年、懷良親王の600年、相良の400年と妙見一带に歴史が集約しています。その歴史を掘り起こす意味でも、標高20、30メートルのところに遊歩道を作り、遊歩道の傍らには宮本武蔵の墓もありますし、そのほかの有名な人の墓もあります。アートボリスの趣旨を掲げて立場の異なる方が参画して、建築に真剣に取り組んでいる。そして建築も観光の名所になれば採算も合います。つまり、それらの建築物は楽しみを満足させるだけではなくて、行政の中で生きていくようなものにしたいと思うわけです。ですから、ユニークなことをやりなさいと常に言っています。八代の場合は博物館を核としてそれがインパクトになり、文化芸術、さらには将来のまちづくりに対する夢を育んでいます。全国に八代にはこのような建物があるとアピールしたいと思っています。八代のみならず水俣、人吉、橋を架けて天草も一連の核としてまちづくりを考えたいと思っています。手作りのアートボリスを通して、魅力のある八代を考える本当の機会になっているわけです。



「くまもとアートポリス'92」 の 全体総括と今後の展望

くまもとアートポリス'92 実行委員会副会長：
アートポリスアドバイザー 堀内清治

■「くまもとアートポリス」の確かな歩み

堀内——「くまもとアートポリス'92」の最後のイベントであるアートポリスフォーラムがまもなく終わります。第1期の「くまもとアートポリス」事業を私なりに総括して、第2期のアートポリスに向けての期待と要望をお話しし、ご挨拶にしたいと思います。1988年から始まった「くまもとアートポリス」の事業により、この4年間に現在の世界の第一線で活躍している建築家の設計になる28にものぼる建物ができました。これらの建築物は内外の有能な建築家たちがそれぞれ知能と技術を総動員して建設された作品です。現在望むことができる最高水準の建築だと言っていいと思います。工事を担当した建設業者の方にとっても、日常的にはこのように難しい注文が出ることは数多くはないので、高度な建設技術を磨き技術水準を高めるという意味ではまたとない機会であったと思います。地元の建設業の方はたいへんまじめに研究をし、誠実に仕事をしたと設計者から感謝と称賛を受けています。またその技術力は県外からも高く評価を受けるようになってきました。「くまもとアートポリス」によって建てられた斬新な建築は単により建築ができたということだけではなく、それぞれの地域の人々に強い印象を与えています。先の報告会で詳しく紹介されたように、そのような建築を核として新しいまちづくりを展開していく試みがすでに活動を始め、そして成果を上げつつあります。また熊本県には数多くの歴史的建造物があります。それらは我々の祖先が作り残してくれた、我々にとってかけがえのない文化遺産です。熊本の生活環境を考えると、それらは重要な構成要素となっているわけです。これは将来ともに変わることがないと思いますが、やがては熊本の大自然を背景にして、新旧の文化遺産が互いにハーモニーを増幅し合って歴史の厚みを増しながら新しい時代の生活環境に溶け込んでいくものと思います。県立美術館分館で開かれた「くまもとアートポリス」の国際建築展では「くまもとアートポリス」の建築と歴史的建造物とを一堂に並べ、熊本の建築の全容を展示するように努めました。また世界の諸都市で行なわれている建築活動も都市デザインの現状を認識するという観点から採り上げて紹介展示しました。この期間中に全国各地から、あるいは遠くヨーロッパの都市から、多くの人々が熊本を訪れました。国際建築展の入場者は7500人を超えました。熱心な来館者の多くはその後アートポリス見学ツアーに参加したり、あるいは個人で見学旅行に出かけたり、広く県内各地を駆けめぐっています。そしてアートポリスの建築や歴史的建造物と一緒に熊本県の風土や生活を実際に体験しました。熊本県を多くの人々によく知ってもらうためには、またとない機会になったと思います。それらの人々は「くまもとアートポリス」の予想以上の成果に驚きを禁じえませんでした。我々が話し合った人々は誰でもこのような事業を行なっている熊本県に対する称賛と羨望を率直に語ってくれ

ました。今やアートボリス事業は全国的な関心を呼び、熊本県は文化的先進県として確実に高い評価を受けるようになったと思います。また、「くまもとアートボリス'92」の重要なイベントとして行なわれた「都市デザインサミット」のシンポジウムでは、都市デザインの分野で大きな業績を上げている内外の多くの建築家が参加し、現在世界の各地で展開されている都市デザインの現状と諸問題が浮き彫りにされました。また「都市と行政」のかかわり、「住宅と生活」、「建築と文化」の問題に対して、それぞれの分科会で突っ込んだ議論がなされました。この一連のシンポジウムを通じて、我々も世界的な視野において「くまもとアートボリス」を考え、客観的な評価を下すことができるようになったと思います。また、そのシンポジウムでは、今後進むべき道を考える際たいへん示唆に富んだ忠告や助言を得ることができました。また「くまもとアートボリス」は都市デザインの分野における日本の業績として、国際的に評価される確かな足掛かりを得たと思います。国際シンポジウムと並行して八代市、熊本市、小国町では「まちなみ展」が開かれました。あるいはそれらの付随行事が行なわれました。11月の熊本県はデザインとまちづくりの祭典という観を呈し、この間約13万人が行事に参加しました。これらの行事は言うまでもなく、それぞれの地元の建築関係者、建築家、建設業者、あるいは日ごろは建築とは関係のない芸術家、デザイナー、自治体職員、ボランティアの参加によって実現されたものです。これほど多方面の人々がふるさとづくり、まちおこしのために一致協力したことはかつてなかったことです。どのような行事でも開催するためには長い準備と努力が必要です。参加協力していただいた多くの人々が、多大な努力を払ってくださったことに対して感謝に堪えない次第であります。しかし一面ではこれらの行事に参画した人々は専門分野の違いを超え、内外の多くの人々と知り合うことができたと思います。そしてお互いの豊かな人脈作りができたと思います。これは将来の熊本のまちづくりを考えるときに、それぞれの町で活用できる何よりの財産になると思っています。

■アートボリスのもう1つの目的

先ほどから何度も繰り返されているように、後世に遺産として残すに足る本当に文化的価値をもつ建築を、1つでも多く熊本に作ることである、というのがアートボリスの目的の半分であると思っています。古代ローマの建築家ヴィトルヴィウスは「建築はUtilitas, Firmitas, Venusutasの利を備えていなくてはならない」と書いています。この言葉は日本語では簡略に＜用、強、美＞と訳されています。建築はいわゆる美術と違い、実用的目的をもって建てられるものですから、建築がその実用目的を十分果たさなければならないということは言うまでもありません。建築が安全に立ち続けるためには十分な強さと堅固さが必要である、これも言う

までもないことです。絵や彫刻は嫌なら見ないですますことができますが、建築は見ないわけにはいかない。さらに必要な場合には中に入っていかなくてならない。建築は社会に対して大きな影響力をもっています。建築が与える好ましい心理的な精神的な効果を美と呼ぶわけです。ヴィトルヴィウスの言葉を言い直すなら、＜機能、構造、デザイン＞となるのかもしれませんが。建築では初めからこの3つは一体となって構想され、どれか1つだけが満足されればよいというものではありません。また、＜用＞と＜強＞が満たされたから次は＜美＞を加えるのではうまくいきません。単に見せかけだけの目新しいデザインをひけらかすことは本当の建築ではありません。つまりデザインか機能かと問うことはほとんど意味のないことです。戦後日本では、特に公共建築では建築に対する伝統的な観念をすべて忘れていました。したがって建築は本来もっていた力を失っていると思います。熊本のアートポリスの目的はいわゆるデザイン優先などというのではなく、建築を本来の王道に帰すことだと信じています。そのように理解して協力してきました。先ほどそれはアートポリスの目的の半分であると言いましたが、我々は優れた建築を作って、それを県下にばらまけば役目が終わるとは考えていません。歴史的建造物を見ればわかるように、本当に優れた建築は必ず周囲によい影響を及ぼすはずです。優れた建築を核とし、その影響を線に伸ばし、面に広げて、より豊かで住みやすい、あるいは多彩で生きがいの感じられるまちづくりにつなげていくことが究極の目的です。たいへん泥臭い草の根のまちづくりから、いわば成層圏に属するような多種多様な価値をまちの中に取り込めるような、新しい時代のふるさとづくりを支援し活性化することがアートポリスのもう1つの目的だと思っています。

■第2期アートポリスの展望

今回の国際建築展で総括されたこれまでの活動を第1期アートポリスと呼ぶとすると、第2期アートポリスは当然、第1期で評価された長所を伸ばし、批判された短所を改善していくことになります。「くまもとアートポリス」において内外から最も高い評価を得たのは＜コミッショナー制度＞です。第1期アートポリスが成功を取った最大の理由は磯崎新氏をコミッショナーに選んだことです。したがってこの制度はアートポリスの根幹として今後も持続すべきだと思います。今回行なわれた様々なシンポジウムで県外の専門家から高い評価を得たもう1つの点は、アートポリスが公営住宅を採り上げたことです。しかし地元からの批判が最も集中したのも公営住宅でした。これほどはっきりと評価が分かれたことは珍しく、また注目に値すべきことであると考えます。第1期のアートポリスは県主導のいわば上からのアートポリスでした。しかしアートポリスの大きな目標がふるさとづくり、まちづくりにあるとすれば、その主体となる市民、県民が主導するアートポリスが盛り上がるのが望ましい

ことはいうまでもありません。民間の建築がアートポリスに参加できるような工夫をこらす必要があります、第2期にはもっと多様なアートポリスになることが望まれます。建築は注文主と建築家と職人の協同作業で、3者の協力と意志疎通がないと本当によい建築物を建てることは難しいのです。しかし、ときとして発注者の意志や役割がよく見えないケースがあります。民間の参加も要請し、多様なアートポリスを目指すために、必要に応じてクライアントを支援することのできるシステムを作る必要があると思います。第1期には、基本構想や基本計画ができあがってからアートポリスに参加することが一般的でした。このようなシステムではコミSSIONナーが十分な機能を発揮できないこともありました。アドバイザー制度は実際にはまったく機能しませんでした。アートポリスに対する批判の一部はこのことに由来しています。第2期においては基本構想から施工まで、すべての段階でアドバイザーの必要があれば必要に応じられる能力をもった組織を作り、アドバイザー制度を補強する必要があると考えます。最後に第1期アートポリスに対する様々な批判には、単純に誤解によるものがたくさんありました。元来行政が行なう説明は県民1人1人に説明することができない以上、どのような場合にも説明不足という事態は避けられません。しかし、公共のものである建築は、説明不足による誤解をそのままにして進行することは望ましいことではありません。これを解決するために計画の進行に伴って県民に展覽し、誰でも意見を述べ、対話のできる公開の場所が必要です。このことはアートポリスに限りません。都市計画、道路計画など多くの住民に影響を与える建設工事一般にも当てはまることです。今後のまちづくり、景観行政、都市行政にはこのようなマスコミュニケーションの場、すなわちフォーラムの空間が必要なのではないのでしょうか。第1期のアートポリスを経験した熊本県では、もしそのような場が与えられるならば産官学、住民が協力して、その場を支える準備はすでにできていると思います。最後に第1期アートポリスの成功を皆様とともに祝い、第2期のアートポリスがさらにすばらしい成果を上げられますようにお祈りしまして、挨拶といたします。



● 閉会挨拶

くまもとアートポリス'92 実行委員会会長：

熊本県知事 福島譲二

福島——アートポリス事業の4年間の成果を広く国の内外に発表するために11月の約1カ月間開催してまいりました国際建築展「くまもとアートポリス'92」も、いよいよ閉会のときとなりました。私も先ほどから拝聴してまいりましたが、たくさんの皆様方が熱心にフォーラムにも参加していただき、そして閉会の行事に参加していただきましたことを心から御礼申し上げます。今回の催しは約1カ月間という長丁場になったわけですが、この種の試みとしては全国的にも初めてであったと思います。期間中いろいろな方面に大きな反響を呼び、様々な議論が重ねられるなど成功裡に全日程を終了できたと思います。これもひとえに関係者の皆様方の大きなご支援とご尽力のおかげであると、改めて感謝申し上げたいと存じます。このたびの建築展では、先ほどの事業報告でもありましたように様々な角度からアートポリス事業の成果を皆様方にご披露いたしました。設計者のみならず、県内の施工者、設備、構造の関係者の皆様方をはじめとして、海外の行政関係者、建築家などの多くの方々に熊本で意見を述べ合っていただきましたし、またたいへん貴重なご示唆をいただくことができたと思っております。期間中は建築関係者だけでなく、多くの方々に参加をしていただきました。県外からもたいへん大勢の皆様方に熊本を訪れていただき、熊本を強く印象づけられたことも実りの多い建築展であったと思います。アートポリス事業は独自の創意工夫によりまして、世代を超えて県民の皆様方に愛されるような優れた建物を作り、個性豊かな文化の薫り高い魅力あふれる地域の創造を趣旨として推進をしてきたわけでございます。これは長い期間継続して初めて成果が現れる、息の長い事業でありますから、何よりも県民の皆様お1人お1人のご理解とご協力を得ながら推進をすることが必要であると思っております。本日のフォーラムを最後としまして、国際建築展「くまもとアートポリス'92」の幕を閉じますが、同時にアートポリス事業の第2期への新たな出発点となることを確信するものでございます。ただいま堀内先生から率直なアートポリスに対するご感想をうかがいましたが、必ずしも全面的に同感というわけにもまいらない点もございます。改めて関係者の皆様とこの1カ月間の成果について率直に意見を交換しながら、よりよい形で第2期の展開をいたしてまいりたいと思っております。皆様方には、従来にも増していっそうのご支援とご協力を心からお願い申し上げます。最後になりましたが、「国際建築展——くまもとアートポリス'92」にご参加いただいた方々に心から御礼を申し上げますと同時に本建築展の準備、運営に当たり、ご協力、ご支援をいただきました皆さんの関係者の方々に感謝申し上げます、閉会のご挨拶とさせていただきます。

くまもとアートポリス'92 アートポリスフォーラム

KUMAMOTO ARTPOLIS '92 ARTPOLIS FORUM

1993年3月発行

発行 くまもとアートポリス'92実行委員会

事務局:熊本県土木部建築課内

〒862 熊本市水前寺6丁目18-1 TEL096・383・1111

編集 都市デザイン研究所

印刷 株式会社 東陽印刷所

- ☐ 総合記録
- ☐ 都市デザインサミット
- ☒ アートポリスフォーラム
- ☐ デザイン・コンペティション
- ☐ 熊本まちなみ展
- ☐ 八代まちなみ展
- ☐ 小国まちなみ展

**KUMAMOTO
ARTPOLIS '92**

